

弥生人現れる

—大地は実り 人は祈る—

2007 年 2 月 10 日〔土〕から 3 月 25 日〔日〕

1 ごあいさつ

(財)大阪府文化財センターでは、1989 年から、大阪府東大阪市と八尾市に広がる池島・福万寺遺跡^{いけしま ふくまんじ}において発掘調査を実施しています。それ以前では、80 年代の初頭から、大阪府教育委員会、東大阪市、八尾市の各教育委員会によって継続的に調査が行われてきました。この 25 年にわたる発掘調査の結果、弥生時代前期から近代に至るまでの農耕^{いた}の移り変わりや、私たちの祖先^{そせん}がたび重なる自然災害に立ち向かいながらも、この地で日々の暮らしを営^{いとな}んだ様子が、地下に良好に保存されていることが明らかとなりました。その成果は発掘調査報告書としてまとめられ、日本のみならず、海外の考古学者からもその名を知られる遺跡となっています。

また、2004 年から発掘調査が行われた、04-2 調査区では、これまでの調査では不明な点が多かった、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての集落の一部と、そこに暮らし^{ほうむ}た人が葬られたであろう墓地、多くの土器とともに、土偶や石棒など、当時のまつりに使用されたと考えられる遺物が発見され、弥生時代の始まりを考える上で、幅広い資料を提供する遺跡であることが判明しました。

今回の展示では、04-2 調査区における新発見を中心として、縄文時代晩期から弥生時代前期に河内潟^{かわちがた}の南東岸に展開した遺跡の出土遺物をあつめ、この地域における弥生時代の始まりの様相を明らかにしたいと思います。あわせて池島・福万寺遺跡の 25 年間の発掘調査の成果を展示いたします。



池島・福万寺遺跡上空から生駒山地を望む（西から）

2 縄文のおわりと弥生のはじまり



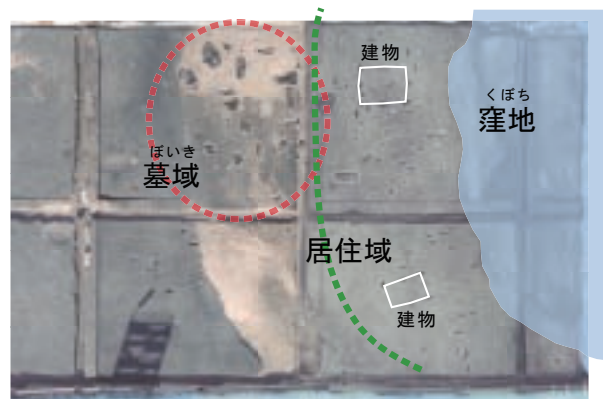
木棺墓



土器棺墓



土坑墓



O4-2 調査区でみつかった墓域と居住域

広大な池島・福万寺遺跡の中でも、生駒山^{ふもと}の麓に近いO4-2 調査区で行われた調査で、縄文時代晩期から弥生時代前期の集落と墓域が発見されました。お墓の中には、当時の人の歯や、骨が残っているものもありました。木の板を組み合わせた木棺墓^{もっかんぼ}が4基、体の小さな子供を大きな土器を使って埋葬^{まいそう}したと考えられる土器棺墓^{どきかんぼ}が2基、地面に穴を掘って死者を直接埋める土坑墓^{どこうぼ}が6基の合計12基のお墓が見つかりました。木棺墓と土坑墓は、調査区の中で、それぞれ北と南に群をつくっているように位置していました。

木棺墓は、縄文時代にはほとんど見られないお墓の形態で、木棺に使われる板を加工する技術、道具とともに弥生時代から本格的に導入されます。今回発見された木棺墓は、同じ地層から発見された土器などから、近畿では最古級の例となることが明らかになりました。残念ながら大部分の木材は長い時間を経て腐^{くさ}って土に返ってしまいましたが、大まかな構造や規模はわかる状態でした。木棺の長さは約140cmから155cmで、これは当時の大人の男性の平均身長（157cm前後）から考えると若干小さい印象を受けます。他の遺跡の例などから屈肢葬^{くっしそう}と呼ばれる、軽くひざを曲げた状態で埋葬されていた可能性も考えられます。木棺墓のひとつでは、棺の外から、死者に対する弔^{とむら}いの気持ちをこめたのでしょうか、ミニチュアの土器がみつかっています。

このように、近接して3種類の墓が存在している様相は、いったい何を反映しているのでしょうか。木棺墓や土坑墓^{ほうむ}に葬られた人は、はたして同じ集団に属する人だったのでしょうか、それとも、それぞれ文化的背景を異にする人たちの墓なののでしょうか。今回の発見が投げかける、とても興味深い研究課題です。



墓域の検出状況（北から）

今回発掘された場所からは、多くの土器とともに、土偶、石棒などの当時のまつりに関連する遺物が見つかっています。土器は、縄文時代晩期からの伝統を引き継ぐ突帯文土器と、弥生時代前期に西日本に広がった遠賀川系土器が混在していますが、突帯文土器が全体の9割以上を占めています。また、土偶や石棒といった遺物が出土したことも、どちらかといえば、縄文時代の伝統を引き継ぐ文化を維持していた人々が暮らしていたことを示すものです。

浮線文土器は、現在の長野県を中心とする地域でこの時期に発達した土器で、遠方との文化的交流があったことを示しています。出土例は少なく、本品のように文様の全体の構図がわかるものは、近畿では大変希少な例となります。

土器棺に用いられた壺は、弥生時代の前期の土器の一例です。壺の肩の部分には、この時期の土器の特徴のひとつである、削り出しによる段があり、それより上部分には、先のとがった工具による線がめぐっています。

一般的に土偶というと、写実的な表現で、顔、胴、手足をもったものがイメージされますが、この時代の西日本では、非常に抽象的で一見しただけでは「？」とってしまうような形をした土偶が主流となります。現代に生きるわれわれには理解しにくい造形ですが、乳房や正中線を表現する例が多く、女性を象徴するものであると言えます。一方、石棒は、その形から男性器を模したものであると考えられています。つまり、土偶＝女性、石棒＝男性をそれぞれ象徴し、これらを用いた当時のまつりは、両性の結びつきによって新たな生命が誕生することへの礼賛、ひいては豊かな収穫や繁栄を願うものであったと考えられています。



浮線文土器



上／土器棺に利用された壺とその蓋に利用された鉢



左／土偶



石棒（左端はほぼ完形）



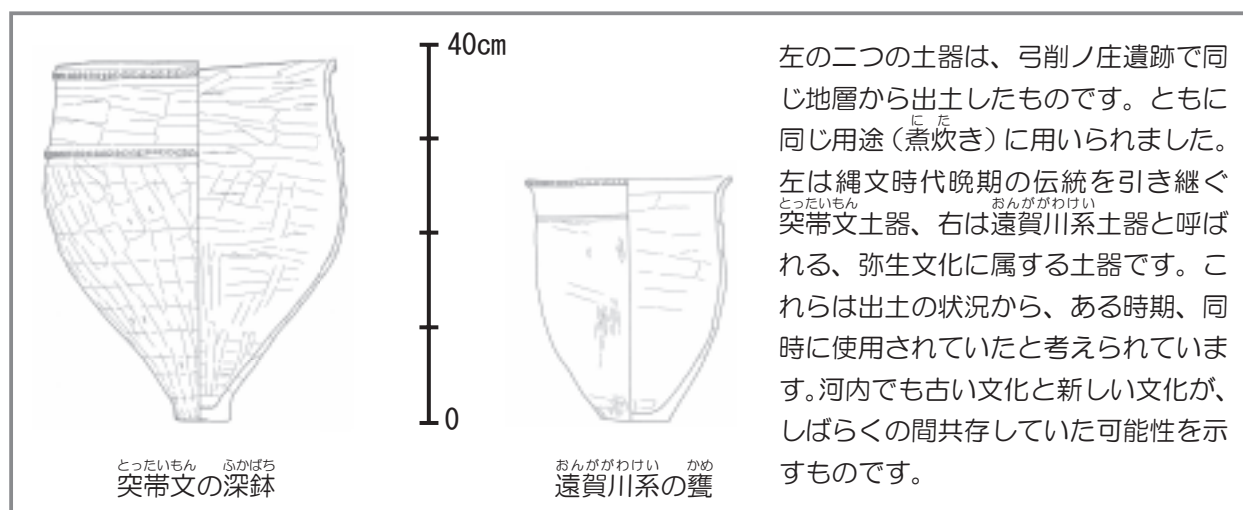
台式土偶（破線は推定復元線）

3 縄文人はどこへ行った？

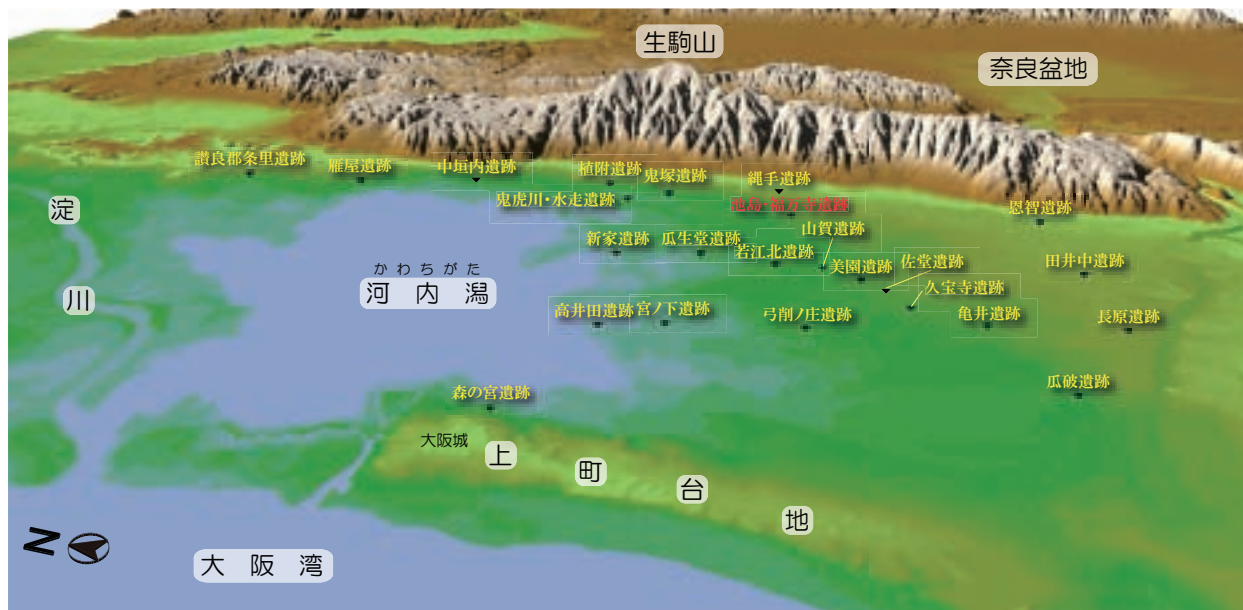
縄文人はどこへ行ったか。また、弥生人とはいったいどのような集団を指すのか。この時代を研究する上での最大の疑問に対して、多くの研究がなされ、ひろく議論されてきました。当然のことですが、ある日突然、縄文時代が終わりを告げ、弥生時代が始まり、今まで日本列島に住んでいた人が新しくやって来た人と入れ替わってしまったというわけではありません。新しい時代が始まろうとするその前夜、朝鮮半島や中国から渡来した人々により、本格的な水田稲作とともに、さまざまな文化要素が持ち込まれ、弥生時代の幕開けへと歩みはじめました。

弥生文化は、各地域の伝統的な縄文文化との接触を繰り返しながら、徐々に日本列島を東へと進んで行ったのでした。その先々で、弥生の文化は根をおろし、旧来の伝統的な社会に変革を促しました。縄文文化と弥生文化は互いに文化的交流をもち、次第に融合を果たしたものと考えられています。その緩やかな変化の中で、私たちが教科書で学んだ典型的な弥生時代の文化の土台が形成されていきました。今回のO4-2 調査区での発見は、そのような過程を示す一例といえるでしょう。

新しい時代へと移る際に起こる、社会の変化を捉えることは非常に重要なテーマです。今回の展示は、まさにこの時期の社会の様相の一端を示す貴重な資料を提供するものです。



同じ地層から出土した、二系統の土器（弓削ノ庄遺跡報告書より転載、一部加筆）



縄文時代晩期から弥生時代前期ごろの河内湍沿岸に分布する遺跡（大阪湾上空より北東方向を望む）

4 池島・福万寺遺跡発掘調査 25 年の^{そくせき}足跡

恩智川治水緑地（池島・福万寺遺跡）の発掘調査

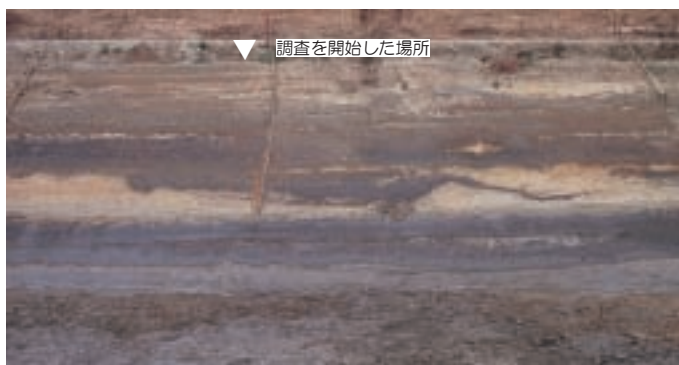
大阪市の東部や、大東市は土地が低く、大雨のたびに洪水の危険にさらされてきました。恩智川治水緑地は、雨水を一時的に溜めることにより、川に流れる水の量を減らし、洪水を防ぐための施設です。この治水緑地の建設に伴って、地下に眠る文化財の発掘調査を行っています。これまでの発掘では、縄文時代晩期から明治時代まで、約 25 面にも及ぶ、それぞれの時代の地表面の調査を行ってきました。写真に見える暗灰色の^{しまちよう}縞模様一つ一つが、それぞれむかしの地表面です。

この遺跡の特徴は、各時代の地表面が、洪水によって運ばれた^{どしや}土砂（写真の黄白色の層）により埋もれ、良好に保存されていることにあります。したがって、すべての時代ではありませんが、むかしの水田の跡などがあるのまの姿で見つかることが多いのです。

発掘されたむかしの様子は、まるでタイムマシンにのって時代をさかのぼったかのように、過去を^{かいま}垣間見せてくれます。



恩智川治水緑地完成予想図（計画）



池島・福万寺遺跡の地層断面（暗灰色の遺構面と、黄白色洪水砂層が幾重にも積み重なっている）

発掘された池島・福万寺遺跡の各時代

この遺跡付近は、現在でも古代以来の^{じょうりちわり}条里地割が良好に残るところとして著名です。調査以前の航空写真では、遺跡付近一帯に^{こばん}碁盤の目のような土地の区割りが南北に^{せいぜん}整然と並んでいる様子が見えています。正方形の区画が「坪」という大きな区画で、その中に見えるタテやヨコの細長い区画が一つの耕作の単位となっています。池島・福万寺遺跡周辺では、こうした区画が、約 1,000 年にもわたって、ほとんどそのまま受け継がれていることが発掘調査によって明らかになってきています。

また、室町時代以降、現代までのこうした耕作地では、「^{しまばた}島畠」という土地の利用法が盛んに行われていました。この遺跡で



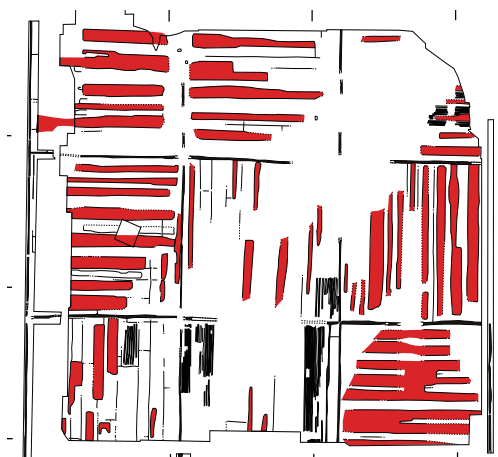
条里地割の痕跡がはっきりわかる航空写真 昭和 49 年撮影
「国土画像情報 カラー空中写真」国土交通省より転載



検出された島畠の列（明るい茶色の部分が島畠）



島畠の断面（拡張されていく様子がわかる）



福万寺Ⅰ期地区の島畠の分布(赤い部分が島畠)



畦畔の検出作業

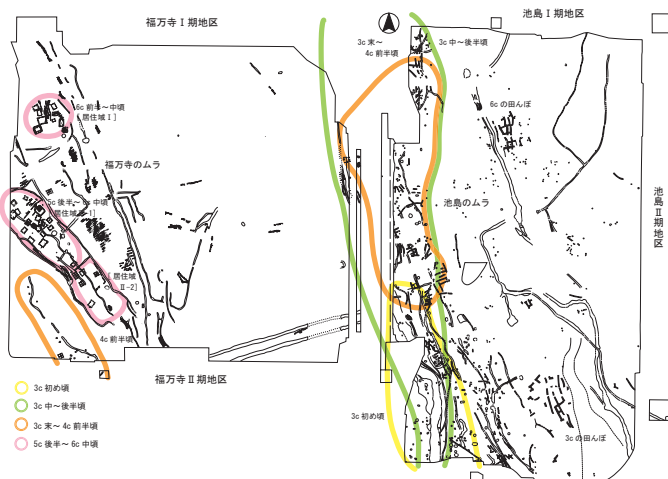
見られる^{しまばた}島畠は、洪水で埋まった水田を^{ふっきゅう}復旧させ、耕作地を有効に活用する方法の一つで、洪水の砂を一箇所に集めて島のように盛って^{はたけ}畠を造り、まわりは元どりの水田にするというものです。一度造られた島畠は、洪水のたびに水田の上にたまった砂をかき集める事から徐々に大きくなっていく様子が断面写真に良く現われています。

こうした島畠は、近世以降、徐々に増え、図に示した福万寺Ⅰ期地区では東と西に分かれて島畠が大きく広がっている様子が明らかとなっています。こうして東西に分かれているのは、それぞれ原因となった洪水がやってきた方向が違うからです。

耕作地の調査では、水田の畦畔、島畠などとともに牛や馬を使った耕作の痕跡や、当時、実際に使われた農具などが見つかっています。また、むかしの農地の土を水で洗って含まれる植物の分析を行った結果、^{こむぎ}小麦や^{おおむぎ}大麦、^{うり}瓜などの種子や^{もみ}籾殻が見つかり、いろいろな作物が栽培されていたことがわかりました。

古代から現代にかけて、文字史料では不明な点が多い条里地割を伴う農耕の歴史、土地利用の変遷や農耕技術の推移が、発掘調査によって鮮明に姿を現しています。

古墳時代には、2つの時期に営まれたムラの跡が見つかっています。古墳時代初頭のムラでは、たくさんの土器を埋めた穴（^{どこう}土坑）



古墳時代の遺構分布図

や溝などがみつかっています。同じ頃、生駒山麓では西ノ山古墳や花岡山古墳などの前方後円墳が築かれました。古墳時代中期から後期のムラの調査では、屋敷地や家々の建ち並ぶ様子が明らかとなっています。大阪平野に巨大な前方後円墳が築かれたのと同じ時期に、人が住んでいたようです。

古墳時代中期には、遺跡の東、生駒山麓に、この地域最大の前方後円墳である、心合寺山古墳が築かれ、後期には、同じ山麓一帯に直径10mほどの小規模な古墳が何百基も築かれ「群集墳」が形成されています。池島・福万寺の当時のムラの住人もこうした古墳築造に関わっていたと考えられます。

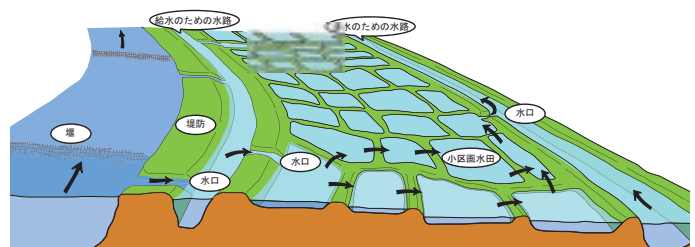
河内潟沿岸は、大阪平野でも稲作が比較的早くはじまった地域で、弥生時代の水田が4面見つかっています。この時代、洪水によって地形がめまぐるしく変化するなかで、水田の造成が繰り返されました。調査によって当時の人々がどのように水田を広げ、それぞれに水が行き渡るようにしたのかという水田造成技術がほぼ完全に解る形で見つかっています。弥生時代の水田では全国でも最も広範囲に調査を行い、良好に検出された貴重な遺跡です。池島・福万寺遺跡の調査は、新聞紙上をにぎわすような派手な発見は少ないのですが、生活の根幹である農耕の歴史を解明するうえで重要な遺跡といえます。



弥生時代後期の水田（赤い部分が畦畔）



弥生時代の水田検出状況（弥生時代中期）



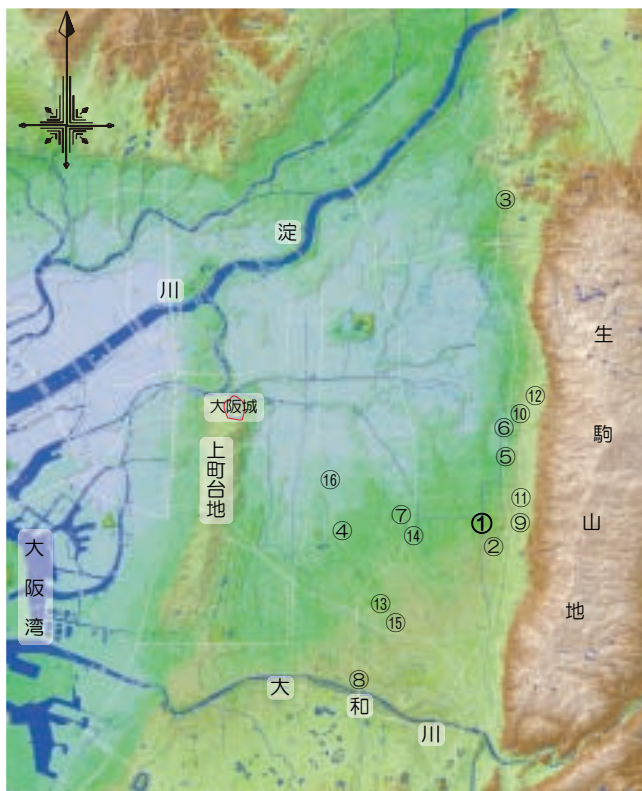
水田に水をまわす方法



検出された古墳時代中期の集落のあと



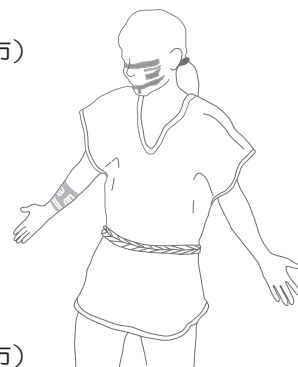
古墳時代中期の集落復元図



主要出展遺跡位置図

主要出展遺跡

- ①池島・福万寺遺跡（東大阪市、八尾市）
- ②大竹西遺跡（八尾市）
- ③讃良郡条里遺跡（寝屋川市、四条畷市）
- ④弓削ノ庄遺跡（東大阪市）
- ⑤鬼塚遺跡（東大阪市）
- ⑥鬼虎川・水走遺跡（東大阪市）
- ⑦若江北遺跡（東大阪市）
- ⑧長原遺跡（大阪市）
- ⑨馬場川遺跡（東大阪市）
- ⑩植附遺跡（東大阪市）
- ⑪縄手遺跡（東大阪市）
- ⑫日下遺跡（東大阪市）
- ⑬久宝寺遺跡（八尾市）
- ⑭山賀遺跡（八尾市）
- ⑮跡部遺跡（八尾市）
- ⑯宮ノ下遺跡（東大阪市）



上記遺跡の出土品ほか、出品総数 約 500 点

■ 今回の小テーマ展の開催にあたり、資料の調査や借用をはじめ、各関係機関から格別のご指導とご協力を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

大阪府教育委員会、大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、財団法人大阪府文化財協会、八尾市教育委員会、八尾市立歴史民俗資料館、八尾市立埋蔵文化財調査センター、財団法人八尾市文化財調査研究会、東大阪市教育委員会、東大阪市立郷土博物館、東大阪市立埋蔵文化財センター、宇治市教育委員会、宇治市歴史資料館、宗教法人平等院（順不同、敬称略）

■ 考古学セミナー（全 2 回）

- 両日とも、午後 2 時から 4 時（受付は午後 1 時から）
- 場所／1 階ホール ● 定員 170 名（当日先着順）

第 1 回 2 月 24 日〔土〕

第 2 回 3 月 11 日〔日〕

「米づくりが始まった頃の池島・福万寺遺跡」

「ある日、縄文人は弥生人になったのか？」

水野正好〔(財)大阪府文化財センター 理事長〕

金関 恕〔大阪府立弥生文化博物館 館長〕

調査担当者〔(財)大阪府文化財センター 池島支所〕

豆谷和之〔田原本町教育委員会文化財保存課 主査〕

若林邦彦〔同志社大学歴史資料館 専任講師〕

■ ワークショップ「ミニ土偶をつくる」



大むかしの人の気持ちになって土偶をつくってみよう!! ●開催日／2 月 17 日〔土〕、3 月 3 日〔土〕、3 月 17 日〔土〕 ●時間／午後 2 時から 3 時 ●先着順 20 名さま

大阪府立弥生文化博物館 平成 19 年冬季企画展／(財)大阪府文化財センター 小テーマ展示

シリーズ「ここまでわかった考古学」

池島・福万寺遺跡発掘調査 25 周年記念 弥生人現れる 一大地は実り 人は祈る一

主催／大阪府立弥生文化博物館・財団法人大阪府文化財センター

編集／財団法人大阪府文化財センター 〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

発行／2007 年 2 月 10 日 印刷／(株)中島弘文堂印刷所

※本事業は、平成 18 年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金によるものです。

